

Title	共生思想の基盤をめぐる地下水脈
Author(s)	稲田, 敦子
Citation	聖学院大学論叢,20(2) : 111-122
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=35
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

共生思想の基盤をめぐる地下水脈

— エドワード・カーペンターの内発的發展論 —

稲 田 敦 子

A Subterranean Stem of a Foundation of Pioneering Thought on Coexistence:

The Theory of Endogenous Development of Edward Carpenter

Atsuko INADA

The main objective of this research study will be to examine the theories of internally generated development as one of the points on which there is contact between the ideas of Sanshiro Ishikawa and Edward Carpenter. The thought of Ishikawa, as evident in “Domin Seikatsu Shiso”(Thought of Native Life), which was a translation of “democracy” suggested by E. Carpenter, points to many negatives in contemporary materialistic civilization to ask basic questions and from that perspective, seek reform of the ongoing crises in the world, most importantly the destruction of the environment.

In the thought of Ishikawa, we see the influence of Edward Carpenter. Through an examination of the comparative intellectual history of both men, this research study will take an independent look into the effect that western European criticism of contemporary civilization had on the intellectual history of modern Japan. Carpenter was keenly aware that nature was entering a critical state, and he questioned the one-dimensional nature of this ideal of progress in the forward thrust of modernization⁽¹⁾. The age in which he lived was one in which clouds had begun to form over the optimism previously felt about qualitative progress in the reality of human life compared to the acceleration of forward progress in civilization's size.

It was a time when the change in the paradigm of our existence from an open to a closed thread was beginning to remove the ideal of progress from the stage. Humanistic nature lost its absolute character and had been removed from the human feeling of an existence in reality and the human as absolute, and there was no longer any opportunity to put the brakes on these feelings even within the self.

Key words: 共生思想, 内発的發展論, エドワード・カーペンター

はじめに

本稿の目的は、比較思想史の観点から、人類の普遍的課題である共生の問題を先駆的に提起しながらも、これまで近代思想史上であまり光の当てられていなかったいわば思想の地下水脈の一路に焦点を当てて掘り起こす試みである。

「人間は危機の時代に自然に回帰する。自己の存在とその基盤がゆさぶられ、脅かされる
とき、人はたしかなものを求めて内外の自然のなかにわけいり、その深みを凝視しようとする。
現実が虚偽と腐食の兆候を示しはじめるとき、しばしば自然がそれに対置される。だが、
往々にして危機の時代には、なりよりも自然が危機的相貌を呈しはじめるものだ。その背理
が人間を混迷させ、危機を生きぬこうとする努力を困憊させる。⁽²⁾」

人間をとりまく自然的、物理的環境と人間集団や人間社会の諸々の相互関係に関する研究は近年重要課題となってきた。自然的、物理的、化学的環境を視野に入れて、それらと人間社会、人間集団の関係を研究することは、近代文明が推進されるにつれて、人間社会の生活基盤がおびやかされる危機意識と密接に関連している。人間と自然との関係性を本当の意味で問うということは、自然のとらえなおしと同時に、自己自身への問い直しを行うことを意味する。人間の物理的自然の支配は止まるところのないかの如くだが、人間的自然の克服、人間が自分自身を支配するということはどうだろうか。このような根源的な問いかけをした人物の一人がイギリスのエドワード・カーペンター（1844～1929）であり、近代日本形成期にあって彼から大きな思想的影響を受けたのが石川三四郎（1876～1956）である。両者の共通の問題意識は、社会総体とその中での自己を、自然を射程に組み込むことにより、解決の糸口を探ろうとするものである。言い換えれば、彼らの思想的接点は「人間的自然」の全体性の回復を、「本来的自然」と「社会的自然」との調和的状态において成立させる方策を求めようとしたことであろう。

第一章 問題の所在—比較思想史的視点をめぐって

比較思想史研究を行う上で、方法論をめぐる理論や分析の枠組みは、必ずしも明確ではない。マルク・ブロックは、その著『比較史の方法』において、比較史を「一定の類似性が存在すると思われる二つあるいはそれ以上の現象を選び出し、選び出された現象それぞれの発展の道筋をあとづけ、それらの間の類似点と相違点を確定し、そして可能な限り類似および相似の生じた理由を説明すること⁽³⁾」と定義している。これをふまえて、それが適用されるには、まず比較の対象が次の二点にまとめられる。第一は「時間的には空間的にも著しく隔たっているため、明らかに相互の影響関係によってもあるいはいかなる意味の起源の共通性によっても、その類似が説明されえない」場合で

ある。第二は「隣接していると同時に同時代のものであり、相互に絶えず影響を与えあっており、発展の過程において、まさにその近接性と同時性故に、同一の大きな原因の作用に支配されており、少なくとも部分的には共通の起源に遡る⁽⁴⁾」場合である。ブロックの説明は、この第二の方に力点がおかれている。

比較研究における第一次史料に基づいた問題意識の設定および事実の発見は、従来の固定観念を相対化することになる。このことは、「事実を発見し問題を提示するという、索出的な効用を基盤とした認識の再発見であるとともに、間接的には現代的な要請によりよく応えることになるのである。⁽⁵⁾」比較研究の対象とする領域が拡大していくにつれ、歴史学的ヴィジョンの領域が縮小していくという状況に対して、アンリ・ピレンヌは、「歴史学における比較の方法について」と題した講演において、「人種の偏見、政治的偏見、国民的偏見は、人間がその力の及ばぬところに身をおかない限り逃れることができないほど強力に、人間を捕らえています。これらの偏見から開放されますためには、人間は高みに昇らなければなりません。そこから見ると、歴史の全体がその発展の尊厳の中に立ち現れ、この光景の崇高さの前にその時々の一時的激情が落ち着き鎮静するあの高みにまで昇らなければなりません。比較の方法によらずして、いかにしてこの高みに到達できるのでしょうか。比較の方法のみが、歴史家をして自分を取り囲む罟を避けさせることができ、自分の研究する諸事実をその正確な価値において、学問的真理の適格な度合いにおいて、認定するのを可能ならしめることができるのです。⁽⁶⁾」と述べることにより、「感情の偶像」に捕われることへの警告を発した。

比較研究が、ピレンヌの述べるように「偏見」からの開放に対する唯一の方法であると断定することはできないが、彼は、研究関心の対象が狭い領域に集中することによって、全体像を見失う危険性を指摘しているのである。彼の論題が第一次世界大戦が終結して間もない時に提起されたということは、現代の課題をきわめて早い時期に提起したものであり、学際的な研究への提言となっている。

本稿では、共生思想の基盤としての内発的發展論に焦点を当て、とくにイギリス資本主義の「構造転換」に連動して肥大化した社会関係の中で希薄化していく人間の現実的存在の危機状況を強く意識したエドワード・カーペンターの思想形成を検討する。カーペンターの主著である *Towards Democracy* (1883年) の主題は、人間存在の精神的基礎としての協同性をめぐる精神的デモクラシー（“spiritual democracy”）であるが、ここに開かれ領域は、社会関係における「機能一役割」的關係から「実体一人格」的關係への再生の可能性をさぐる試みの一つと考えられる。

普遍的理念の登場は、その担い手としての自由な個人が主体的に形成されることを要請する。この個人は一方で、共同体的な規制や上下関係などの外的束縛を断ち切ろうとする。しかし、この自由な個人も、彼の存在を支えている構造としての世界システムからは自由ではない。このシステムが発展し、高度化することによってそれまでの生活基盤は解体されることとなる。このような状況

に対して、カーペンターは、近代文明批判をふまえた調和的社会論を展開し、イギリスのミルソープで自然との共生をはかる新しい共同体の再編を試みたのである。

このカーペンターの近代文明批判から展開された共生思想に大きな衝撃を受け、独自の思想を形成し近代日本の冬の時代にも警鐘を鳴らしつづけたのが、日露非戦論を思想的出発点とした石川三四郎である。その思想形成過程を探ることは、異質の文化を受けとめた近代日本の思想土壌の中で、思想の普遍性と特殊性、連続性と断絶性、また基底にあるものと表層にあるものという二重構造に注目しながら、個と共同性をめぐる問題に対する根源的な問い直しにその射程をのばしていくことにつながるものであろう。1915年に渡英した石川は、カーペンターとの思想的交流を深めることにより、思想形成へと内実化していったが、とくにカーペンターによる共同体形成の試みは、新しい変革主体を軸とした共同体の再編成の可能性を示したものである⁽⁷⁾。本稿の目的は、近代化を世界にさきがけて推進したイギリスにおいて、いち早く近代文明社会における問題を提起したカーペンターをとりあげ、その先駆的な内発的發展論を検討することである。

第二章 内発的發展論の形成過程

第一節 内発的發展論の視座

「もし発展が、個人として、また社会的存在として、開放と自己展開をめざす人間の発展であるとするならば、このような発展は事実上、それぞれの社会の内部から発現するものでなければならない⁽⁸⁾。」内発的發展とは、西欧をモデルとする近代化論がもたらすさまざまな弊害を癒し、あるいは予防するための社会変化の過程である。内発的發展の担い手は、その目指す価値および規範を明確に指示する。近代化論が先発先進国の経験にもとづいて、アメリカを中心に形成されてきた経緯に対して、内発的發展論は後発高度工業化社会、非同盟諸国および発展途上国の経験に基づいて、構築されつつある。近代化論が一般理論であるのに対して、内発的發展論は、異なる地域におこりつつある、方向性をもった社会変化の事例にもとづいて、抽象度の低い理論化から出発しようとする試みである。本稿で検討するエドワード・カーペンターの論稿をあとづける作業は、まさにこの事例研究として位置づけられる。

内発的發展論の内容を明確に定義したのは、鶴見和子である。すなわち、鶴見の主著である『内発的發展論の展開』（1996年）によると「内発的發展とは、目標において人類共通であり、目標達成への経路と、その目標を実現するであろう社会のモデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。共通目標とは、地球上すべての人々および集団が、衣・食・住・医療の基本的必要を充足し、それぞれ個人の人間としての可能性を十分に発現できる条件を作り出すことである。それは、現在の国内および国際間の格差を生み出す構造を、人々が協力して変革することを意味する。そこへ至る経路と、目標を実現する社会の姿と、人々の暮らしの流儀とは、それぞれの地域の人々およ

び集団が、固有の自然生態系に適合し、文化遺産（伝統）に基づいて、外来の知識・技術・制度などを、照合しつつ、自律的に創出する⁽⁹⁾。」

ここに示された構成要件は、岩村沢也の分析によって以下の10項目にまとめられる。

- 1) Basic Human Needs としての衣・食・住・健康・教育等人間が生きるための基本的欲求の充足。
- 2) 人間一人ひとりが人間としての可能性を十分に発揮できる社会の構築。
- 3) 本人の責任や原因ではないのに、苦痛を被ってしまう不条理を軽減することが「発展」の重要な指標であり方向である。
- 4) 各地域の共同体の人々の協働による発展であること。すなわち、他律的な発展ではなく、生活者の創造性を重視すること。
- 5) 各地域の自然環境と調和をたもつこと。
- 6) 各地域の文化遺産や歴史的条件を考慮した発展。
- 7) 近代的生活様式としての資源浪費型や他者依存型生活からの転換。
- 8) 自力更生または自助型社会への志向。自活・自律できることが、豊かさを示す指標であり、道徳的であるという思想。
- 9) これらを実現するために自己犠牲を厭わないリーダーシップを発揮するキー・パーソンが存在。
- 10) 社会内部での実現可能な構造的改革が必要⁽¹⁰⁾。

これら10項目にまとめられた構成要件では、必ずしも一つの国家の下位体系には限定されない地域を分析の単位とする点に独自性がある。玉野井芳郎は、「地域主義とは、一定地域の住民がその地域の風土的個性を背景に、その地域の共同体に対して一体感をもち、地域の行政的・経済的自立と文化的独立性とを追求することを言う⁽¹¹⁾。」と定義している。この「地域主義」と「地方主義」から識別するために、「内発的地域主義」という用語をも用いられたが、それは地域住民の自治を強調することを主眼としたものである。

さらに、玉野井は次のように述べて「生活者」を地域の担い手とした。「……『地域』という私がかねてから主張しております人間等身大の視座に立つと、その世界の中に『生活者』という地域の担い手が現れてきます。国家や国民という概念だけではなしに、生活者という、そういう地域の担い手の姿を見つめますと、日常的責任を持って生活している人たちの顔やかたちやふるまいが浮かび上がってきます。その生活者たちは、地域における土と水から成る日常性の生態的生活環境の中で、生命を生み出し、生命を育て、生命を守っている⁽¹²⁾。」玉野井が地域を小さく限定し、そして実体として捉えたのは、水と土にもとづく人間の生活が営まれる場所を強調するためであった。しかし、ここで提示された限定された実体としての小地域を基礎として、その他の地域との関係を考慮にいて地域を再定義すると、コミュニティの概念に重ね合わせることができる。

ジェシー・バーナードによると、コミュニティは(1)限定された場所 (locale) と、(2)共通の紐帯 (common ties) と、(3)社会的相互作用 (social inter-action) の三つの共通要素があるという。このコミュニティ概念の三要素をめぐっては、各々の意味内容を考えると、それぞれ、次のような事柄が内包される。すなわち、(1)定住地、定住者、定住性。(2)共通の価値、目標、思想。(3)定住者間の相互作用と、定住者と地域外からの漂泊者との相互作用との双方を含む関係性、と解釈することができよう。バーナードによると、「場所」を強調する場合、「定冠詞付きのコミュニティ」(the

community) とよび、場所の限定を省く場合は、定冠詞なしのコミュニティとして区別しようと提案している。定冠詞付きのコミュニティはもともと定着農業を基礎とする集団について適用し、場所の限定のないコミュニティは、狩猟民の集団について考えられたものであった。バーナードは、この二つのコミュニティに関するパラダイムをもって、分析対象にせまり成果をあげてきた。

ジェシー・バーナードによるコミュニティをめぐる試論は、エドワード・カーペンターの「調和的社会論」で提起され、その問題意識は、思想的接点を求めた石川三四郎の「複式網状組織」に連なるものである。両者は、ともにそれぞれの「網のつなぎ目」にみる主体の固有性への視点が核となっており、それが固有価値論にも連なるものとなっている。

第二節 「もう一つの発展：Alternative Development」

固有価値論をめぐる問題は、主体の問題にあわせて、文明の個性的継承の視点から地域の個性と内発的發展および地域の固有価値を相互に活かしかう発想に展開されていくものである。固有価値とは、「何らかの物がもっている、生を支える絶対的な力である。一定の品質と重さの一束の小麦は、その中に身体にとって本質的なものを持続的に支える測定可能な力をもっている。また一立方フィートのきれいな空気は体温を持続的に支える確固とした力⁽¹³⁾」をもつものである。物の内在的な性質を強調することは、その性質が他の物にはない一種の「個性」であることを顕在化させることである。物の個性およびその多様化は、人間が自然科学の知識を応用して物の固有性を活かす力量が発達するほど分業が多様化され、物の個性について選択する可能性は拡大される。そこでは、「すべてのものが、その内在的価値 (their intrinsic worth) に従って評価されるし、いかなるものもその費用や希少性のゆえにのみ評価されることはない、また、いかなる種類の流行も存在する余地はないだろう。⁽¹⁴⁾」この固有価値をめぐる個性と多様性を認識することが、個における内発性ととともに内発的發展の可能性の契機となるであろう。

近代文明の構築が加速化するなかで、きわめて多岐にわたるいわば「人工環境」が創造されてく過程は、なんらかのかたちで自然を改変し、自然状態から脱却して「人間の自然」を人工的に作り出す軌跡となってきた。近代化が推進されにつれ、社会システムは発展し高度化していくが、そのことによって従来の生活基盤はおびやかされ、ときには解体される危険にさらされる。また、肥大化した社会関係の中では、個的な存在はまわりの状況に封じ込まれ、その結果として、人間の現実的存在感は希薄になっていくこととなる。時代とともに、文明が生み出す多種多様な技術が個々の生活レベルに蓄積されるようになり、「国家が形成されて人口の累積とともに経済活動がしだいに成熟するようになってくると、自然に対する人間のかかわり方がよりいっそう功利的になり、自然環境と人工環境がしだいに敵対関係に入り込んでいく。⁽¹⁵⁾」都市生態系が自然生態系と多くの点で共通性をもちながらも、やはり基本的にことになっているのは、環境に対する人間の主体的な働きかけが重要な要因をなしている。

ダドレー・シアーズによれば、「発展とは、すべての人間のパーソナリティの可能性を実現することを目標とし、貧困と失業をなくし、所得配分と教育機会とを均等にすることである。⁽¹⁶⁾」ととらえ、いわば外的環境の発展への視座とともに、各個人の内面の主体性に目を向けた内発的発展の可能性を明らかにした。このことは、シアーズの「新しい発展の意味」(1979年)における論文で、社会的・人間的意味を包括した自助概念の提起でより明確になったと思われる。すなわち、経済面では自給率を高め、文化面におけるそれぞれの固有性の尊重と促進し、実現するためには、自助努力が必要であり、内発的に自己を内面から高めていくという視座が示されている。この視点は、内発的発展論の「もう一つの発展 Alternative Development」として、外的な発展に対しての人間の内的な発展を強く推し進める自助と共生の概念の提示なのである。1977年にダグ・ハマーショルド財団が第7回国連特別総会に提出したレポートが「もう一つの発展—いくつかのアプローチと戦略」であり、そこでは、ゆがんだ発展(Maldevelopment)を生み出す経済成長優先の発展に代わる「もう一つの発展」としての内発的に自己実現をはかるとともに共生をすすめることが中核を占めている。

こうした問題提起は、アジアにおける内発的発展を唱える動きにも通じており、ブッダ・ダサやスラック・シラワクが提唱したタイの自助運動がその事例である。中核となる考え方は、「発展は欲望を少なくし暴力を避け、物質よりも精神を発展させることである。⁽¹⁷⁾」と述べられていることに端的に示されている。ここでは、より多くのモノを生産することを主眼とした物質面での発展に對峙して、各個の「自律性の高まり」と「他者との調和、他者への奉仕」が主張されており、「真の意味での文明は、欲望をたえず増幅することにあるのではなくて、むしろ欲望を決然と、意志の力で減少させることにある。このことによってのみわたしたちは、真の幸福や満足感を高め、他人に奉仕する能力を増大させることができる。⁽¹⁸⁾」ということに集約されるであろう。この主張は、モノづくりと消費文明に行き詰まり、自然環境と人工環境が敵対関係に入りこんでいく状況への厳しい警告となっている。このような警告を世界の工場として近代化を推し進めたイギリスにあって、すでに20世紀に入る以前に先駆的に問題提起をした一人がエドワード・カーペンターである。

第三章 エドワード・カーペンターの試論

20世紀初頭に「テラー・フォードの改革」に象徴される合理化が進み、その結果、既存の利益優先のシステムのもとでは、外在的な自然破壊をもたらすだけでなく、人間の内在的価値をもむしばむ状況が進行することとなる。生産への意欲、自己自身に対する否定的側面が顕現されはじめ、都市部の市民にとっては、「共同性」が見出せないか、または未成熟の状態で放置されるという事態を引き起こす可能性が増大された。カーペンターの生きた時代は、産業革命後の工業化の進展がもたらす社会の変化に揺れており、近代化が推進されるにつれて社会システムは発展し高度化していくが、そのことによって、従来你的生活基盤はおびやかされ、深刻な状況をひきおこす危険性は高

くなってくる。工業化の矛盾が集約的に顕在化した1850年代以降、イギリス史の中で光と影を描く振幅を大きくさせていたが、その時期にカーペンターは、多感な時期を過ごすこととなる。肥大化した社会関係の中では、個的な存在はまわりの状況に封じ込まれ、その結果として、人間の現実的存在感は希薄となっていくこととなる。特にイギリス資本主義の「構造転換」に連動して、カーペンターは、この希薄化をめぐる危機状況を強く意識することとなった。

この時すでに彼の生涯の課題となった共生思想の問題がテーマとされていたのである。彼は、この時期に、きわめて文学的な形で近代文明がもたらす否定的な側面の問題をとりあげるとともに、人間をとりまく外的自然と内的自然の両面における内発的發展を課題とした。カーペンターにおける内発的發展論は、彼の論稿である“Social Progress and Individual Effort”(1885年)にも示されるように、社会調和論と密接な関連性をもっている。カーペンターによる「社会調和論」では、「自我の実現」や「人格の完成」は、一個人だけではなく他者を意識し、各々が他者を認めることが第一であり、そのような者として配慮する意思をもつ人びとの間にのみ社会は存在するものであると主張したのである。

カーペンターにおいて共生思想の出発点とも言うことができる『民主主義への展望』(Towards Democracy, 1883年)は、前述したように、人間存在の精神的基礎としての共同性をめぐる精神的デモクラシーを提起している。その内容は以下の2点にまとめられよう。第一には、生活そのものが、何が「善良な、美しいもの」なのか、実際に生きる、価値のあるものにされうる、またされねばならぬということである。第二には、産業それ自身が喜びまたは「快樂」にならねばならないことを、命題として挙げられている。この命題から、彼は労働が快樂となるためには、それが自由であり想像的な性質をもたねければならない。すなわち、極言するならば、労働や産業が「芸術」とならなければならない、という主張を引き出している。この「芸術」とは、具体的には詩作や絵画のこののみを意味するのではなく、利潤のためではなく、自分の仕事をできるだけ完全に果たそうとする「洗濯女」は金や名声のために制作に時間を費やす画家よりもはるかに芸術家であるという意味をも込めたものであった。

ここにみられる主張には、近代文明が「モノ」の生産性向上を優先させる中で、「パン」ではなく、「美的な」ものの追求を生活の基盤として認識していこうとする姿勢がみられる。しかも、このことが、理念のみを先行させてしまう運動論ではなく、生活レベルにおいて「パン」のみならず「美」の追求をめざした新しい内発的發展論の一形態として提起されたところに彼の先駆性がみられるといえよう。

カーペンターによる調和的社会論では、国家を作為的・支配的立場に立つ表層的なものとして排し、生活者を基盤とする自然的・生活的な次元でのあり方を第一義的なものとした。すなわち、現実的にはその優越性に基づいて社会的関係全般を支配している国家も、本来的には社会的有機関係の一機能を担う集団であるにすぎないのである。したがって、国家それ自体の支配性を中集団へ

縮小させ、そのうえで協同関係を作り上げることが求められた。このような志向には、強者生存の合理性をとく社会ダーウィニズムへの厳しい批判が根底にあったと推察される。権力の集中構造が固定化し、効率的社会において有用性のみが推進される制度を、いずれははがれていく外皮とみなした。彼は、社会進化に対し、社会はその存在の基盤を求め、必要に適合すべく外皮を脱ぎ捨てて進んでいくものであると考え、また社会の進歩は、規制の法や制度の固定化による弊害への絶えざる告発が必要であると述べている²⁰。

社会ダーウィニズムが強者生存の合理性を説くとき、当然ながらその論旨への批判も起こってきた。特に、産業資本主義の展開に伴う「蔭」の部分が拡大していくと、その理論では現実を覆いつくせなくなったのである。社会進化論批判がダーウィンへの批判としてなされるとき、おのずとダーウィン以前の進化論者ラマルクがよびおこされたことはそれなりの必然であった。そしてそれは時を経て、新ラマルク主義として確立され、思想界に一定の力を持つこととなってくるのである。カーペンターが『文明・その原因および救治』（Civilization: Its Cause and Cure）を表したのは1889年であり、彼もまた新ラマルク主義の影響をかなり受けていた。

ラマルクは、科学的経験主義に対するものとして、いわば「可視的影響」に代わって「有機構成」を分析対象とし、そのことが「全体」という観念に内実を付与するようにさせた。そして、生命の系統は、一連の階層的な秩序をなすものであり、「枝分かれした系列」という重要な観念を引き出し、その体系化を進めた。それは彼が表した *Philosophie zoologique* 2巻において、進化論のほかに生命論、感覚論が記述されていることにも示されているのである。

カーペンターは、近代資本主義文明を社会的道徳的な「疾病」とみなした。疾病とは、健康を構成する生理的統一の喪失から発生するものであり、その結果、各部分間の闘争ないし軋轢もしくは諸器官の異常な発達、また組織の消耗などをおこすものである。これに対比させて、われわれの近代社会における生活もまた「真の社会を構成するところの統一が失われて、そのかわりに各階級間ないし個人間の闘争、他を侵害するようなあらゆるものの異常な発達、およびおびただしい社会的寄生群による組織の消耗など」が見られ、諸種の民族が一度はかからなければならない疾病と見るのである。

後の1919年に出版された *The Healing of Nations and the Hidden Sources of Their Strife* では、“Class-disease” という言い方をして一階級が共通の利益に従わず、自らの益とその行使のみを求めて行政権力までもを奪うならば、それはまさに病気になるのと同様であるとみなしたのである。「社会的疾病」は、身体の病気と同じく、掠奪階級があり寄生状態があり、つまりは調和の喪失となって精神的「疾病」状態にかかっているのであると指摘する。こうした「社会的寄生群による組織の消耗」は、「個人間の闘争、他を侵害するあらゆるものの異常な発達」と不可欠であった。そこでさらに彼が指摘しているのは、個々人それぞれにおいて、自己がその統一体として自分そのものである状態から、自己矛盾や自己撞着などから自らの中での「統一の消失」をきたすという状態とし

て、「疾病」をとらえていた点である。このような視点には、前述した社会ダーウィニズムとして示される強者生存の合理性への批判があり、それはカーペンターの共生思想の基底に流れるいわば地下水脈といえよう。

おわりに

カーペンターの初期にかかれた論稿として「芸術の宗教的影響」と題する小論文や「自然の風景」(“Art and Democracy” *Progressive Review*, 1896)の中で、各個人がそれぞれ異なるのは、自然の全体をそれぞれ違った方向で自分のなかで総括するからである、と述べられている。つまり、人が、同じ精神を異なる視点から見るためであるという論旨をもって「聖なる個人主義」(holy individualism)ともいわれる一面を提示することとなった。これは個人の意識や生活態度の変革を第一義的に考え、その前提のない組織的集団的社会解放の行動を信頼しないという内省的・求道的な志向のあらわれであろう。この内省的な志向は、自然のとらえなおしにも通じていくのである。以下に引用するのは、カーペンターから出された友人宛の書簡であるが、その独自の自然観への萌芽的な要素が見ることができる。

“I have often thought of you and our conversation, while I have been away: and ever with the increasing conviction that anything which raises our deepest feelings cannot be a mere shadow… To me all scenes of nature being ultimately the same feeling, there is a deep unity underlying all the diversity of their beauty. And equally do I believe it true that there is a spirit of what is noble and beautiful passing through all men alike, inspiring alike all their wonderfully distinct personalities. Therefore, even if the individual admiration be perishable in its accidents it can-not be so in essence …You see that I make a medley of Kant, Comte, and Christianity …I have been preaching and have consequently got into voluble habits.”⁽²¹⁾

カーペンターが文明批判論で自然への復帰に言及した際に、具体的に考えていたことは、自然との直接交流としての各個人それぞれの生産活動であって、そこには自然との「一体化」を求めるということでもなく、山河での隠遁とは全く位相が異なるものである。

“Do not hurry: have faith…….

Covet not overmuch. Let the strong desires come and go;

refuse them not, disown them not; but think not that in them

lurks finally the think you want.

Presently they will fade away and into the intolerable light

Will dissolve like gossamer before the sun.”⁽²²⁾

彼は、シェフィールドでの煙害問題を深刻にうけとめ、生産者の利益のために工業と農業とを結

合させることによるあたらしい生産活動のあり方を模索し、「産業の村」構想を提案するにいたるのである。彼は、小規模企業の存続をはかり、さらにそれが新しい中心の軸をもって生産活動を発展させていくことを目指して、生産者の主体的な活動組織をつくることを構想した。

そうした状況を新しい視点から生かして、小規模ながら直接生産できる共同体をそれぞれ作り、その中で相互の共同活動を目指そうとしたのである。このことは、資本主義的大企業による生産活動に対する対抗組織として、地域の実情に即した試みであった。このことこそ、カーペンターの文明批判としての実践的なかたちでの先駆的な意味を持つものであるといえよう。

カーペンターは、環境としての自然のみならず人間の本性を内包させる内的自然が全体性を失い、現実的存在感から遊離していくあり方を認識し、さらには、自己内部において、このような状況に歯止めをかける契機を持ち得なくなることへの危機感をつのらせたのである。このことから、人間が自己の存在とその基盤がゆさぶられていく内外の自然の問題が検討され、カーペンターの内発的發展論の視座となったのである。

注

- (1) Edward Carpenter, *Civilization: Its Cause and Cure*, London, 1889 pp.10-11
- (2) 安永寿延『安藤昌益』平凡社、1976年、7頁
- (3) マルク・ブロック、高橋清徳訳『比較史の方法』創文社、1976年、5頁
- (4) 前掲書 9頁
- (5) 参照 齊藤修「比較史の意味と意義」『比較史の遠近法』NTT出版、1997年
- (6) アンリ・ピレンヌ、佐々木克己訳「歴史学における比較の方法について」『創文』169号、1978年（参照 齊藤修 前掲書）
参照 田中浩「思想史研究の意義と方法」『未来』493号 未来社、2007年
- (7) 「人間—自然」原理と関係性の変容についておよび石川三四郎とエドワード・カーペンターの比較研究については、以下を参照。拙著『共生思想の先駆的系譜—石川三四郎とエドワード・カーペンター』木魂社、2000年
- (8) Dag Hammarskjöld Foundation, *Que Faire?* 1975, p.35 参照 西川潤「内発的發展論の起源と今日的意義」鶴見和子他編『内発的發展論』東京大学出版会、1989年
- (9) 鶴見和子「内発的發展論にむけて」鶴見和子『内発的發展論の展開』東京大学出版会、1996年、pp. 15~18
- (10) 岩村沢也「内発的發展論と自己組織理論」鶴見和子教授退職記念論文集編集部編『内発的發展論にむけて』鶴見和子教授退職記念論文集編集委員会、1989年、pp. 52~63
- (11) 玉野井芳郎『地域分権の思想』東洋経済社、1977年、p. 7
- (12) 玉野井芳郎『地域主義の思想』農村漁村文化協会、1977年、p. 119
- (13) ラスキン『ムネラ・ブルウエリス』序文13節（池上淳『生活の芸術化』丸善 1993年参照）
- (14) 土方直史『協同思想の形成』中央大学出版部、1993年、p. 344
- (15) 合田周平『エコパラダイムの時代』丸善、1993年、p. 81
- (16) Duddley Seers, "The Meaning of Development", *The Institute of Development Studies at the University of Sussex*, December, 1969
- (17) Sulak, Sivaraksa, *Sisamese Resurgence: A Thai Buddhist Voice in Asia and a World of Change Asian*

Cultural Forum on Development, Bangkok, 1985, pp. 95-97 (鶴見和子『内発的発展論』p. 45参照, 岩村沢也「内発的発展論の視座」『国際経営・文化研究』Vol. 1, 1996年)

- (18) 西川閏「内発的発展論の起源と今日の意味」『内発的発展論』東京大学出版会, 1989年, p. 21
- (19) Edward Carpenter, *Towards Democracy*, (1st ed.) (Manchester and London, 1883)
- (20) M. バルテルミ・マドール, 横山輝雄・寺田元一訳『ラマルクと進化論』朝日新聞社, 1993年, pp. 175- 177
- (21) Edward Carpenter to C. G. Oates, 12 Sept. 1869,
- (22) R. Sharland in *Social Democrat*, Aug. 1929